
異界の相談所～ハローワーカー～

ゆーたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界の相談所〜ハローワーカー〜

【Nコード】

N5473Q

【作者名】

ゆーたん

【あらすじ】

勇者と魔王の戦いは過去の話。

ここは異界の中の一つの都市ファルティバティール。

今日もそこで働く相談所職員の青年は、一人の少女と出会う。

その少女は――

1（前書き）

一応オリジナルです。
字数とか気にせずのんびりやっています。

「ねえ、おばあちゃん。ゆうしゃさまのおはなしかせて」

小さい頃の私は、大好きな祖母の話す世界を救った勇者様の話が大好きだった。あの頃の感情を言い表すと、幼いながらに恋をしていたのかもしれない。

「ああ、いいよ。そうだね、あれは今から八十年くらい前——」

そう言っただけで祖母の弱弱しい手に頭を撫でられながら、話を聞くのがとてもとても楽しみだった。

「おばあちゃんは、会った事あるの？」

祖母からしたら、恐らくそうとう目をキラキラさせた私が迫ってきて困ったかもしれない。それでもその質問に対しては、いつも見た事無いくらい優しく慈しむような優しい笑みを浮かべて、「ええ」と答えた。それを確かめる術はないけれど、今にして思えば祖母は恋をしていたのかもしれない。心の中でひっそりと、天に召されるその時まで。

だけど私は自由に恋愛できない運命を受け入れていた。そして勇者たちを送り込んだこの世界とは違う異界、その王、魔王に私を差し出すという運命を。私が嫁ぐことで、魔王がこちらの世界に影響を及ぼさないようになればいいのだろう。そもそも魔王がどんなのか、そんな話し合いに応じるかもわからないのに、お城の重鎮たちは自信ありといった顔つきをしていたのを今でも覚えている。

「はい、次ぎ」

今日何度目かの欠伸と同時に、自分のカウンターの対面に並ぶヒトの多さに肩を落としてつつ次のヒトを呼ぶ。ヒトと言ってもそれは総称であり、種族はいくつかに分けられている。三本以上の足で歩くヒトは獣族、二足歩行するヒトは人族、体の一部に翼があり空を飛べるヒトは翼族、平屋より高い体のヒトは巨族、そして昆虫系は虫族。大まかにこういった種族で分けられている。

「あ、はい」

先ほど抜けたヒトの分間隔が空いたカウンターに一步分近づいたヒトが、一枚の書類をカウンターの上に差し出してきた。声と手の感じから女性だとなんとなく感が働く。その書類を手で広い上げで記載内容に目を通すと、案の定性別は女性を示す記号であった。必要事項は全て埋まっている事を確認し、俺は視線を目の前のヒトに移す。青色の長い髪の毛先が軽くカールしている。服装はノースリーブタイプの淡い緑のワンピースに、カーディガンを羽織っていた。

「確認のため、袖をまくっていただけますか？」

女性に対して本来であれば失礼に値するが、彼女に対してはしかたがない。なぜなら種族が翼族で、翼があるとすれば背中か腕である。カーディガンまで羽織る事を考えると、背中にあるのでは窮屈と思ったため腕にあるだろうと判断した。

「はい」

女性の嫌がる風は無く手馴れた様子で、カーディガンの袖を捲く
った。俺の予想通り綺麗に翼が折りたたまれている。彼女は書類に
記載通りの翼族で女性鳥人というタイプだ。

「ここへはどういった予定ですか？短期に長期、それから——」
「職を探しています」

俺が言おうと思っていた最後の言葉と同じのを彼女が告げると、
カウンター脇の備え付けの棚から冊子等数点を取り出してカウンタ
ーへと置いた。

「こちらが資料です。職探しの方はここから右手の階段を上がつて、
二階へ上がってください。職員が待機していますのでそちらの案内
に従ってください」

規定通りの内容を答えると、彼女は「ありがとう」という言葉と
共に笑顔を添えてカウンターから離れて行った。綺麗な女性にそう
言われるだけで、こんなにも心に栄養が満たされるんだなと改めて
感じつつ次のヒトを呼ぶ。にこにこ笑顔で向けた視線の先には先
ほどとは真逆で、強持ての牛の顔に体をした牛人だったため再び俺
の心は萎んだ。

かつては別の世界から勇者と名乗る者達が現れ、この世界に侵略
してきた。これに対し各種族の最たる者達である統主が、彼らを撃
退して来た。もちろん種族がすべて仲が良好なわけではない。今で
も何かのきっかけで覇権を巡る戦いが起こる可能性がある。そして
その覇権を巡る戦いの際、統主同士の激しい力のぶつかり合いによ
り生じた力場が、別世界に影響を及ぼしその都度勇者がこの世界へ
送り込まれるという形だ。しかし別世界が平和になったのは勇者のお
かげではなく、覇権を巡る戦いが終わったからに過ぎない。

ま、この事実を向こうのやつらが知ったらどんな顔するだろうな
んて思ってみたりもするが、それよりも今はこの目の前の行列をな
んとかする方に集中するべきだなと思い、てきばきと業務をこなす。

ここは人族の統主の一人グロンスという人間の領地内で、1、2を
争う大都市ファルティバテイルの一角にある外部からのヒトをサ
ポートする相談所。^{ハローワーカ}俺はこの職員である。

2 (前書き)

2 話目です。

壁に掛けられている円形の時計で時間を確認しながら、午前中の業務が終了した旨を知らせる札をカウンター脇の出っ張りに下げ掛けた。最近は落ち着いてきたのか、以前の様にお昼を取る時間がなほどヒトがこった返すと言う事はなくなった。他のカウンター内の職員達も、大きく伸びをしたり関節を鳴らしながら間抜けな一面を覗かせている。

「さつてと」

食事をする事はこの仕事をしている中で、唯一休まる時間帯である。空腹が思考を支配しているこの状況を、香りたつ食欲をそその勾いに誘われるままに店に入り、その料理を堪能する。ここファルティバティールは大きい都市なので、店の数はなかなか多い。価格も高いが食材も一級品の店から、リーズナブルな店に穴場な名店などいろいろだ。

この室内の入り口脇に掛けられてある街の地図を眺めながら、今週行った店を確認しながらどの店で今日はお昼にしようか迷っていると、徐々に近づいて来る足音が一人。内心この時間に来客は面倒だと思いながら、なんであるうとお昼の為断ろうと決意を決めた視線の先には、自分と同じ人間ではない皮膚質と一つ目の顔で身長は一〇〇センチにも満たないであろうヒトが、小さな歩幅を目一杯交互させてやってくる。その人物に心当たりがある俺は、右手を軽く上げ挨拶をするとそれに気づいた一つ目の人物は表情を少し緩めて同じように右手を上げた。

「おお、君がいる日だったか」

「ここ最近はずっといたよ」

他愛の無いやりとりだったが、少しばかり急いでいたらしく一つ目の来客は息を切らしていた。一つ目のしたには丸みのある華に横に長い口、その口の周りは白いひげが覆っている。首はなくそのまま顔自体が体に該当するらしく耳のしたから手、顎の下から足がそれぞれ二本ずつ伸びている。この来客は一つ目人の中で年齢はかなり高く、周りからはゴン爺と呼ばれている。一つ目人の顔は愛くるしく、人族と他の種族との交渉役に選ばれたりしており、このゴン爺は知識もあるため各種族の統主との話し合いも彼のおかげで丸く収まった件も多い。

「実は村に迷子が現れたのだよ」

「迷子？」

迷子、それが何を意味しているのか相談所で働く者であれば察しがつく。今回の迷子というのは、街で子供が親とはぐれた場合をさす者ではない。

「森から出てきたところを、近くの農場主が見つけてな」

「森から？この時期に」

森にはヒトの中で獣族が縄張りとして生活している事が多い。そしてその森には少なからず彼らの統主が存在している場合がある。この時期にというのは、ある一定の時期以外の森への進入はしないという不可侵の約束を、彼らの統主とここ一体の領地を統べるグロノスは結んだ。これにより、森に進入しない限り街や街道を歩くヒトを襲う事はなくなった。暗黙のルールとして森に進入した者は、森の中の弱肉強食のルールを適用するというのがある。これにより不用意に森に入ったものが彼らに襲われても、こちらは手出しはしない。

「一体どこのやつだよ」

さらに今の季節は不可侵の時期であり、神を祭る期間以外の進入は死を意味する。

「詳しくはわからんが、森のヒトらが出てくる場合がある。誰か一緒に来てもらえんだろうか？」

大きな町や都市には鍛えられた兵士や旅をする者達もいるのだが、ゴン爺の住むコルの村は農場などの多い長閑で小さい村なのでそういう者はいない可能性が高い。いないからこそここへやってきたのだろう。こういう事態にも対処できるように、職員には戦闘の手練^{てだれ}も採用している。

午後のスケジュールは——などと思いながら職員の予定が記されたコルク質の四角いボードを確認する。そこには午後のカウンターの配員や外周リ等のプレートが各職員の名前の下に付けられている。そこで自分の場所を確認すると——

「げっ」

思わず感情を口から漏らした割り当ては講担とプレートが付けられており、講担当とは講習担当の略で外部からこの街へ移住してきたヒトへ街の決まり等を説明する仕事である。ただひたすら話すだけなのだが、一日に何度も同じ事話すのは苦行以外の何者でもない。今居る他の職員もこの話を聞いているため、同じようにスケジュールボードを確認している。幸い今日の戦闘担当は全員タイミング悪く出払っている為、すぐにすぐは返答が難しい所であった。

しかし——これはチャンスでもある。俺は咄嗟に思考をフル回転させこの結論に至った。その結論とは――

「よし！ゴン爺の頼みだ、俺が行くよ」

その言葉に顔を明るくさせたゴン爺とは対象に、職員は何を言っ
てんだお前と言わんばかりの表情を一齐に向けてくる。あまりの視
線の痛さに、まぶたに掛かる前髪を左手で払い視線をそらした。

「ダメダメダメ！あんたが抜けると必然的にもう一人減る事に」

猫耳を生やした濃茶色のショートヘアの女性が、掛けているメガ
ネのレンズをギリリと光らせる。今日の業務のマネージャーである
彼女は、お茶をポットから注いでいる青髪の長いストレートの女へ
と視線を向けた。毛先のカールしたその女性は、俺に向けて掌を向
けて指を開く。

「イズル君……いつてらっしゃい」

俺の名前を呼んだその女性はそう言って手を下げた。再びポット
からカップへとお茶を注ぐ動作へ戻る。

「あら、ルミカちゃんが居なくならないならいいわ。スケジュール
を変更しておく」

ここに来た時に職員全員に通達された内容、それは俺が外部への
戦闘の依頼を受けた際は必ずルミカをパートナーとして同行する
というがある。戦闘に置いてルミカと組む事で効率アップ、戦闘時
間短縮に被害が抑えられるというのが主な理由だ。それだけではな
いのだが、別に口外しても何もならない事である。

「イツル君……守ってね」
「はい」

淡々としたトーンの彼女の言葉は、どの上司よりも怖いと感じる事が多々ある。今回も含まれるが。ここ一体の統主グロノスさえも、ルミカから感じる怖さに比べたらまだマシな気がする。この「守ってね」とう言葉の本当の意味は、俺とルミカの間でしかわからないであろう。

「では行ってきます。ゴン爺、お待たせしました」
「あんたが来てくれるなら心強いほう」

そう言つて微笑んだゴン爺は、抱きしめなくなるほど愛らしい表情をしていた。恥も外聞も捨て去って飛びつきたい程だ。

「すまんが、急いで向かつて欲しい。外に移動手段は用意してある」
「わかりました」

先に走り出したゴン爺の後を追って、俺は相談所を出発した。

2（後書き）

1話を恐らく何回かに区切る形になると思います。
本当なら2・1とかの方がいいのでしようけれど、
余計な事考えずにナンバリングしていきます。

3 (前書き)

オリジナルは意外と書き易いなって感じました。

相談所の建物は、中が木造で外観は石造り。全部で三階からなるこの相談所をでると、長方形に整えられた石を木目上に敷き詰めて舗装した道が広がる。道の脇には花壇や木が設置されており、石造りがほとんどの街の内装を少しだけ彩っていた。

「相変わらず賑やかじゃのお」

ゴン爺がそう呟くほどヒトが道を行き来している。お昼時という事もあり夕方 of 中央通り並みにお昼をとるヒトや、そのヒトを自分の店に引こうとしている店員達で溢れていた。行きかう人々は十人十色の服に店それぞれ独自の制服でそれだけでもゴン爺の目には賑やかに映るのだろう。

一つ目人はその皮膚の性質上寒さや熱さにも強い為、彼ら一つ目人は衣類という物を着ない。目に見えて生殖器も無い為、彼らはとくに恥ずかしいという事は感じていない。それは彼らはもちろんの事、他のヒトも初めて一つ目人を見る人以外にとっては当たり前前の事である。

以前どうやって子供を作るのか聞いたのだが、愛くるしい笑顔で濁されてしまった――。

「さ、ゴン爺急ぎましょう」

俺はヒト波にさらわれてしまわない様に、小柄なゴン爺を抱き上げ方に乗せた。いわゆる肩車である。

「イズル君」

女性の声に呼ばれ相談所の方へ振り返ると、こちらへ飛んでくる物体が一つ。特に驚く事は無く右手でそれを受け取る。

「忘れ物」

受け取った剣を確認し自分の左腰の部分を手で触る。うっかりして大事な剣を忘れていたようだ。もしかしたら戦闘になるかもしれないのに、愛用のそれを忘れたのでは意味が無い。講習担当を外れる嬉しさですっかり愛用の剣を忘れてしまっていた。俺には見える……泣いている愛用の剣の顔が。

「すまんルミカ」

剣を受けとった右手を左右に振ると、ルミカも同じように右手を振った。もちろん俺とは違い胸元で小さく二度三度往復させただけであるが。

「では行きましょう」

受け取った剣を腰の左側で鞘ごと剣帯に吊るし、落ちないのを確認してから街の入り口へと向かった。都市という事もあり外敵から守るため、高さ五メートルほどの石造りの壁が街を囲っている。その外壁の東西南北にそれぞれ1つ入り口、いわゆる門が設けられている。街の中央には噴水広場があり、そこから十字に伸びた入り口までの道をク^ッロス通りと呼ばれているその道は、今の時間帯ではヒトがごった返しているのが容易に想像できた。

ゴン爺のコル村はここファルティバティールから西に位置している。その為、街の東クロス通りの東門近くに構えているこの相談所からクロス通りを突っ切り、西門へ向かうのが一番近いのだが恐ら

く効率が悪い。その為街壁内を一周できる街壁横の道を迂回して西門へと向かった。

「はい到着」

迂回してきた道は案の定ヒトも少なく快適なくらいだ。馬車三台くらいが並列で走れるくらいに広いクロス通りに合流し、道幅と同じ大きさの門を潜り抜ける。昼間の時間帯は常に門は開かれており、夜間帯は門の横にある馬車1台が通れるくらいの門で出入りする事が出来る。しかしそれは緊急時用で、基本は夜間は外部から誰かを内部へ入れる事は無い。

「ええっと、ゴン爺の馬車は」

他の街への移動手段としては、基本的には馬や馬車それに徒歩である。ここら辺は土地が開けており森や山などが無い為、基本的に安全といえる。そのため急ぎ出ない場合は徒歩で買い物がてら出かけるヒトも多い。買い物に関しても、大量に購入しても近隣の町への宅配馬車便があるため徒歩で来てもたいして困りはしない。

もちろん今回のゴン爺の依頼は急を要しているため、馬車で来たのだろうと思っていた俺は門の外を見渡してみたが馬のうの字も見つからない。目に入るのは街から百メートル程伸びる整えられた石畳の道、そしてその道の左右に広がる草原である。今の季節は冬が終わり、ようやく暖かくなり始めた心地よい風が草原を駆け巡っていた。

「あれ？ゴン爺、一体何でここまで？」

ゴン爺はその問いには答えずに、「こっちじゃこっち」と俺を手招きしている。いつの間にか石畳の道を進んでいたゴン爺を追いか

けるために走りだした。後を追って走って行くとやがて石畳の道の終点が見える。百メートルとは意外と短いものであると思っていると、ゴン爺は指を口に加え思い切り音高くピーと鳴らした。

どこか鳥の鳴き声のようにも感じられるその音に、重なるように高い音が耳に届く。明らかにゴン爺とは別の所、感覚的には上の方から聞こえるその音を探すように上を見上げると、いつの間にか大きな鳥の影が俺とゴン爺の姿を覆っていく。

「おいおい」

思わずそう呟くほどに大きな鳥は、急降下してきたその体を翼で数回羽ばたき体勢とその速度を調整する。ほぼ真下に居た俺はその羽ばたきで生じる風圧の強さに思わず腕で顔を隠した。十メートルはあるかというその巨体から生み出される迫力ある風貌は、武力の無い旅ビトでは恐怖するであろう。鋭い眼光に嘴は得物を狩る側のそれだ。

「おうおう、こじじや」

風圧に飛ばされないよう踏ん張っているゴン爺は、両手を大きく振る。ゴン爺をその目に捉えた怪鳥とも言えるその鳥は、先ほどの音高い声とは程遠い唸るようにグアアと一鳴きした。見た限り大きい鷲だ。

「ゴン爺この鳥は？」

その問いに今爺は柔らかい表情を変えずに答える。

「いったじゃろ？移動手段じゃよ」

「移動手段で……」

思わず呆れてしまったが、確かに緊急でしかも至急な場合にはこれ以上無い移動手段である事は間違いない。などと感心していると頭上からゴン爺の声が降りてくる。見上げるというの間に乗ったのか、ゴン爺が背中に座っていた。

「さて、それでは行くかの」

その言葉に巨鷲は一回二回と翼を羽ばたかせると、降りてきた時と同じ様に物凄い風圧を生み出しながら体を浮かせる。俺はまだ乗っていないのだが――。

巨鷲は一度鳴くと同時に俺の視界が真横に傾いた。そして腹部に少しだけ圧迫感を感じる。そこには黄色い四本の指が俺を掴み、その指先からは鋭い爪が光っていた。

前にもこんな様な事があったななどと昔を思い出しながら、強引な空の旅へと誘われた。

4（前書き）

4回目の投稿です。

多少強引にゴン爺の移動手段である巨鷲の足に掴まれて、空の旅を敢行するのも案外悪くないものである。実際日常で空を飛ぶのは、翼の無い生物には不可能なわけで高い所から落ちるのは飛行ではなぐただの落下。全身から力を抜き、だりりとしたまま眼下の大地を見下ろすのも悪くは無い。

緑色の丘陵ある草原にやや蛇行気味に引かれる土色の線。多方向から伸びるその線は、やがてぶつかりまた分かれて行く。

ここから北は農場、南は——などと思いながら、すでにファルティバティールの街を西に飛び立ち十分程たつたであろうか。眼下には北西から南東へ緩やかな曲線を描いて流れる川が見えてくる。北西にあるのはまだ上の方が白い化粧をした山から続く川、これを越えればコルの村はすぐ見えてくる。

コルの村は他の街まで伸びる街道がある所以外、全て森に囲まれた村である。村と森までは草原が広がり、農場や畑を構えられる程距離はある。コル村の歴史はそれほど長いわけではない。昔は森の外で暮らすヒトと森の中で暮らすヒトは絶えず争っており、特に森の中で暮らす獣族とは血の争いが絶え間なかった。それに変化があったのはグロノスが統主になった時であった。現在コル村の当たりの森を統べる獣族の統主と会合を儲け、今の不可侵の決まりが出来たのである。そしてグロノスと獣族の統主の知人であるコル爺がここに村を開き今に至る。

「さてそろそろじゃな。またうまい巨魚でもとりに行こう」

ゴン爺のその言葉に反応するように一鳴きし、巨鷲は村に向かって急降下を始めた。急に上に皮膚が引つ張られた為、俺は思わず悲鳴の様な声を漏らした。

「うわあああ」

ぐんぐんと近づく村に建物に地面。街道に面された村の入り口とは反対側に、輪の様な人だかりが目に入る。その時ふいに今までお腹辺りに感じてた圧力が急に抜ける。先程まで掴んでいた黄色い指はなく、ようやく鳥の足から解放されたとともに自分の状況を理解した。

落ちている、そう感じた俺は咄嗟に体を動かしなんとか地面に足を向ける体制を取る。着地と同時に全身で衝撃を和らげるも、完璧に着地とはいかずこけてしまった。そしてその俺の上にゴン爺が見事着地する。俺というクツションによりゴン爺には怪我一つ無い、もちろん俺もないというのを付け加えておこう。

「いやあ、すまんのう」

「いいから降りてくださいよ」

呑気に笑いながら降りるゴン爺を確認してから立ち上がると、目の前には幾重にもなったヒトの壁が目に入る。ヒトの声に獣の唸り声も混じっていた。いそいそと小走り気味に走ると、この壁の向こうでは獣とヒトが対峙しているように見える。このヒト集りを押しのけていくとようやく事態を確認する事ができた。

ヒト集まりを牽制するように一匹の狼がこちらを睨み付けている。大きさは二メートル近くはありそうな程大きい。負けじと村で飼われている犬が吠えるも、体格的には一回りほど狼より小さい為狼は脅威を感じて居ないらしく相手にしていない。

この世界には素力ソースと呼ばれる力が存在しており、それが大地から植物そして生物すべてがこの素力を宿している。その為植物や食物が大きく育ち獣達もその影響での体格が大きい。森や山には特にこの力が強いとされ、神聖な場所と考えるヒトも多い。勇者達がこの

世界にやってきて驚くのは、その植物や生物の大きさに素力ソースの存在である。基本的に人の大きさはどちらの世界でも変わらない。

「はいはい、ハローワーカー相談所職員ですよー」

あえて注目を浴びるように、パンパンと手を鳴らしながらヒト集かりの前に一步踏み出す。睨み付ける狼の向こう側にはもう二匹の狼と、その向こうにある民家の扉の前に人族の大人の男女が三人立ちはだかっている。女性は両手を一杯に広げて体をドアへと押し付ける。その前に立つ男二人は三叉のピッチフォークを手にしている。

「えーと」

俺の存在に気づいた奥の二匹も顔だけこちらに向け威嚇する。それと同時に相手の様子や能力を観察しているのだろう。気にせず家の前に立つ男女の所へ歩みを進めると、手前の一匹がこちらに向けて唸り声を発する。むき出しになる牙の間から涎がたれ、四肢の先に力が徐々にこめられていく。そろそろ飛びかかってくるだろうと予想した俺は、剣帯に吊るしている鞘をはずすと柄に右手を添える。

「グワァン」

狼の気合とも言える鳴き声に反応し、柄を握った右手をそのまま上に上げる。鞘ごと持ち上げた剣で狼の突撃を受け止めそのまま左足を狼の方へ踏み込み、鞘越しに狼へ当て身を入れて押し返す。押し返された狼はそのまま空中で回転し、難なく着地を決めた。その事で残りの二匹の怒りを買ったのか、家の方からこちらへと向き直ると左右並んでいる狼の右の狼が掛けだす。どの生物も動き出す時には特有の前動作があり、前足の動きを見て飛びあがると感じた俺

は、右手に持つ剣を今度は体の正面へと移動し鞘の腹を相手に向ける。ぐつと鞘に当たった感覚を感じた直後に右へと払いのける。

三方へ分かれた狼は、正面に居る狼が攻撃を仕掛けると同時に息を合わせるように動き出す。

その攻撃を鞘で払いのけつつ、次の回避のために体を横にスライドさせ最小限の動きで連続攻撃を回避する。やがて三匹を同じ方向へ弾くと、その中の一匹が鋭い爪を出し体を踏ん張らせる。大きく息を吸い込む動作に入る。

「みな、離れるのじゃ」

ゴン爺のその声を聞き集まっていたヒトは、周りから離れていく。直後大きく吸い込んだ息を狼が咆哮と共に吐き出す。咆哮と共に生み出される衝撃が一直線に俺に対し向かってくる。剣を前に出しその後ろで体を身構えるも、風圧と衝撃で後方へと吹き飛ばされ地面の上を転がり滑る。

獣族の中で狼族が得意とする素力ソースを使った攻撃、一般的に咆哮ブラストと呼ばれるそれは素力をこめた咆哮で衝撃波を起こすもの。威力によつては踏ん張れば耐えられる事もあるため、踏ん張ってみたが案の定吹き飛ばされてしまった。

素力は誰もが秘めている力であるが、使えるかどうかは才能による。この三匹の中で少なくともこいつは才能がある事がこれで判明した。素力はヒトによつて総量と一日に使用できる量が異なり、双方とも大きい者がやがて統主になれる資格がある。どんなに総量が多くても使えなければ意味はないし、どんなに一日の使用量が多くても総量が少なければすぐに枯渇する。そのヒトが持つ総量は、減る事はあつても例外を除いて回復する事はない。

草の上に仰向けになった俺は空を見上げながら、自らに向けて失笑する。

「あちゃゝ、踏ん張りが浅かったか」

ゆっくりと体を起こして服に付いた草や土を払い落とす。対峙する三匹の内先程とは別の一匹が大きく息を吸い込み始める。四肢をピンと踏ん張り鋭い爪を地面に食い込ませる。

やれやれ、と思いながら鞘から剣が抜けないようにロックしているベルトをはずす。少しだけ鞘から引き抜き感触を確かめる。左足を引き上体を左へとゆっくり捻る。深く息を吐き全身から無駄な力を抜き腰を少し落とす。

咆哮と共に生み出された衝撃波が、一目散に土を削り煙を巻き上げながら向かってくる。衝撃波が間合いの手前に来たタイミングで左足を前へ踏み込み横一閃に剣を放つ。刀身とそこに生まれた剣風が咆哮撃のそれとぶつかり、衝撃波をただの強風へと変え体をすり抜けて行く。

すぐに鞘へ納めて狼の様子を伺う。咆哮撃を無効にされた事に怒りを増したのか、睨み付ける眼光が少しばかり鋭さを増したように感じた。鞘から剣が抜けないようにロックをかけ、狼達の方へと足を進める。三匹がそれぞれ二度ほど鳴き、ゆっくりと俺の方へと歩き出す。今にも飛び掛かりそうな狼達であったが、森の奥から響く声に体を硬直させゆっくりと後ろを振り向く。

「やめんか！」

しゃがれた様であるがとても威圧のある力強い声、パキパキと小枝を折る音に草葉を揺らす音が徐々に近づいてくる。姿が見えなくとも感じる存在感が、目の前に居る狼達よりも強大な存在だと教えてくる。やがて姿を現したそれは、白く美しく神々しささえ感じる毛並み。対峙していた狼より倍近くあるその巨体。獣族でありながら同時に巨族にも分類されそうなその狼は、金色の瞳を光らせて見

下ろしてきた。

4（後書き）

お読みいただいております
今後も宜しく願います

5（前書き）

勢いに乗って5回目です。

今日は簡単なキャラ紹介？でも（笑）

イヅル：28歳 179cm 人 ファルティバティールにある相
談所の職員

ゴン爺：100cm未満 一つ目人 コルの村を作り現在は村長補佐

うわー箇条書きで少な（笑）

「おふぁよー」

毎朝必ず飲んでいる味よりも香り重視のお茶を口に含んでいると、眠たそうな声が背後から聞こえてくる。口に含んだお茶を喉に流し顔半分だけ向けて、「おはよう」と手短かに返す。鮮やかなオレンジ色の髪がボサボサのせいでその鮮やかさを損なっている少女が、目を擦りながらテーブルを挟んだ対面の椅子へと腰をおろす。今にも閉じそうな瞼と必死に戦う少女は、すぐに戦意を無くしたのか頬をテーブルにつけて規則正しい寝息をたて始めた。

おいおい、などと思っていると自宅のドアノックする音が三度。いつもの様に一言告げるとそのノックの主は、そのドアをあけて中へと入ってきた。目の前でテーブルで寝息を立てる少女と違い、きちんとかされた毛先がカールした青い髪、非常時の動き易さを重視したパンツタイプの職場の制服を着たルミカは、俺と少女を交互に見やりため息を吐いた。

「なんだよ」

「イズル君はもうちょっと女の子に気を使ったら？自分だけお茶飲んでないで、この子にも出したりとか」

面倒くさいという表情を浮かべた俺を見る前に、手際良く棚からコップを取り出しポットからお茶を注ぐ。コップは二つ、少女用と自分用だ。このやりとりは今に始まった事ではなく、一週間前から続いているもはや恒例のイベントとなりつつある。

「アリーシアちゃん、おはよう」

テーブルにお茶の入ったコップを2つ置いたルミカは、寝息を立てているアリーシャの体を二度程揺らす。良くわからない言葉を発しながら再び体を起こしたアリーシアは、ルミカに「おはよう」と挨拶すると目の前に置かれたコップを手に取りお茶を口に入れる。

「熱っ！」

油断していたのかそのお茶の温度に驚き急いでコップをテーブルに置くと、舌を出して手で扇ぐ。

「う、ごめんね」

「あははは、だいひょーぶだいひょーぶ」

そんなやり取りの後アリーシアは今度は息で冷ましながら、ゆっくりとお茶を口に運んだ。

アリーシアがこの俺の自宅に来たのは一週間前。彼女がコルの村の森から出てきた迷子であり、狼達に狙われていた少女。森を抜ける際に枝にやられて傷ついていたら以外傷はなく、狼達は彼女に手を出していないことは明らかであった。目覚めるや否や、ゴン爺や猫人族で農場を営んでいる女性のコネット等を見て驚いてはいたものの、この一週間の間にこの世界のヒトにはなれてきたようであり、少しばかり俺は安堵を覚えた。

三匹の狼達が硬直するほどの存在、二メートル程あると思われる三匹の狼達の倍近い大きい体のその狼は、神々しささえ感じる白い毛並みをしている。狼達の後ろの森から現れたその白狼は、双眸に

宿す金色の瞳で俺を見下ろす。その瞳の鋭さと迫力は、この三匹とは比べ物にならないほどに圧倒的な差がある。

「助かったよ」

そう告げて手にしていた剣を剣帯に吊るしながら、俺はその白狼の方へと歩みを進めた。ヒト集まりの前で指示していたゴン爺もその警戒を解いたのか深く息を吐いているのが見て取れる。

「お前達は下がっている」

そう告げられた三匹の狼達であつたが、その内の一体だけが身動きせず白狼と視線を交じらせる。俺が彼等の立場だったら納得いかないだろうな、と内思いながらやり取りを見ているとその内観念したのかゆつくりとその体を動かし白狼の後ろへと下がっていく。

「すまなかつたな、うちの若い者が迷惑掛けたな」

「いやいや、こちららも状況を把握できていないのに出しゃばつてしまつてすまなかつた」

白狼は瞼を閉じ軽く頭を下げるのを見た為、俺は少しばかり早口になりながらも謝罪する。

「なあに、迷子とはいえこの時期にお主達の神聖な森に入ってしまったんじゃから、若い彼等に迷惑を掛けてしまったな」

「いやいや、彼等は今夜が始めての巡回役だから気が張っていたんだろう」

「迷子についてはこれから確認してみんなあ。わかつたらお主にも報告しよう」

「ゴン爺がそういうなら待つとしよう。もしかしたらいつぞやの勇

者……みたいなのかも知れないな。なあイズルよ」

「はは、はははは」

白狼の言葉に俺は乾いた笑いを返すしかできず、きつと相手から見たら顔が引き攣っていたらう。クツクツ、と笑うと白狼は森の中へと消えていき、三匹もその後が続いて森の中へと消えて行った。

「あやつが出てきて助かったのう」

ほんとうに、とゴン爺に賛同しながら緊張の糸を解き、俺は肺に押し込めた空気を吐きながら空を仰いだ。まだお昼を少し過ぎた太陽が高く明るいこの時間帯に、あの白き狼が出て来る事はあまり期待していなかった。主に彼らは夜行性の為、昼間の巡回組を除いては大抵寝ている。三匹の様に小柄に属する狼が、何かの拍子に森の外に出てくる事はあっても上位の存在が出てくる事はほとんどない。ましてや白狼はこの一体の森を統べる主、森の外を治める統主がグロノスならば、森の中を治める統主が白狼のアンブROUPである。

5 (後書き)

とくにプロットとか決まっていなくて、のんびりさぐりさぐりです。それでも書いてて気楽です。

ここまで読んでいただいてありがとうございます。

6 (前書き)

おはようございます。

それでは本日も頑張りましょう。

その統主である白狼が森の闇へと消えた後も、暫くは緊張からか村人の息遣いさえ聞こえないほど静寂が包んでいた。誰も動こうとしないこの状況を打破したのはゴン爺の言葉である。

「もう大丈夫じゃぞ。安心するんじゃ」

ゴン爺の声に、言葉によやくヒト達は安心したのかゆっくりではあるがこの場所から離れそれぞれの仕事へと戻って行く。まだ時間帯は昼間な為、まだ農作業や建築作業に勤しむ時間である。

俺は狼に狙われていた家の方に視線を向けると、ドアの前で猫人の女性がへたり込んでいた。その顔色はまだ青みがあるが、表情は徐々にだが強張りを失いつつあるように感じる。土を踏みしめる音を鳴らしながらその女性に近づくと、ややゆっくりとした動作で女性性は顔を上に上げた。極度の緊張下にあったのだらう、その体は少しだけ震えている。

「大丈夫か」

手を差し出すと、一瞬体をびくつかせたがゆっくりと手を握ってくる。猫人特有の掌にある肉球の感触が、とてつもなく心地良い。それに酔いしれている場合ではないと、すぐに意識を現実に戻した俺は女性を一気に引っ張り上げて、起き上がらせる。もちろん、倒れないように空いている左手を女性の腰に回すことは忘れてはいない。

「あ、ああ。ありがとう」

女性がしつかり立っている事を確認し手を離した俺は、振り向いてゴン爺に声をかけた。ゴン爺によればこの女性が農場主のコネットで、迷子を発見した人物である。厚手のコットン地のワンピースは足首まで伸びるロングスカート、色はブラウン系で華やかとは遠い。

迷子の事を確認しに来たことを告げると、コネットは家の中へと招きいれてくれた。室内は暖炉やキッチンなどがあり、特にキッチンはそのなりに大きい。テーブルは十人は座れるくらいの大きさがあるため、農場で働く人たちがここで一同にご飯を食べているのだと容易に想像させた。

「こつちだよ」

室内の奥に有る階段から二階に上がると、迷子を寝かせている部屋のドアの前で立ち止まった。コネットは控えめにノックするも中からの応答は無い。再びコネットがノックするが反応する気配が感じられないため、コネットはゆっくりドアノブを回してドアを押す。ギギ、と蝶番が音を零しながらゆっくりと開き、室内の様子が明らかになっていく。正面には窓が一つ、その左側にベット右側に化粧台の様な鏡突きのテーブルが備えられている。他にはクローゼットなど必要なものは一通りそろっている。

素早く室内を見回してベットに視線を定める。少しだけ掛けられている布団が盛り上がり、小さいが規則正しく布団が上下に動いている。狼達と緊迫した状況は過ぎたとはいえ、森への不可侵の時期に入り込み迷子になったヒトにお仕置きしようと、いたずら心に少しだけ火が付いていた俺は布団を掴み捲る。構わず捲った俺はこの後、後悔することになった。ベットで寝ていた人物は、服を着ておらず胸と腰の部分には光沢の有る表面の生地を使った下着のみの――

「お、女？」

「だからさっきから言ってるじゃないか！女の子だって」

少しだけ言葉に強みがあったコネットの声を聞きながら、急いで捲くった布団を戻そうとした所で最悪の事態が起こる。布団の中で眠る下着姿の女性と目がばつちりと絡み合う。赤いウェーブの掛かったショートヘアに、くりつとした大きな緑色の目。高く美しく鼻筋の通った顔に、薄ピンク色のぷつくりとした唇。顔の幼さから言って女性というか少女だなと冷静に脳内で考える俺を、その少女は目を大きく見開いて数回ぱちくりと瞬きを繰り返す。お互いというかこの室内に居るコネットやゴン爺ですら言葉を発せず、無言の時間が数秒続く。そして――

「いやあああ！変態、スケベ。誰よあんた！服まで脱がして」

劈くような凶器にも等しい叫び声。恐らく村中、いや先程までいたアンブロウプら狼達、あるいは森に生息しているヒト々にまで聞こえているだろうと思いつながら俺は耳を塞ぐ。布団をかき集めながらベットの壁際までずり下がると、近くの化粧台の椅子に掛けられている服を手に取り、何か文句を垂れながら布団の中でもそもそと動いている。

なんだか面倒くさくなり、心の中で交代、と呟きながらコネットに目を配るとやれやれといった表情で俺の変わりにベットの方へと寄っていく。腿辺りに、ぽんと優しく手を伸ばしてくれたゴン爺の優しさについ涙腺が緩む。

「ごめんね、驚いたよね。まったく男どもはほんとに――」
「ぎゃー、ね、猫が喋ってる！化け物ー！」

そう叫んだ少女はコネットに布団を投げつけると、その隙を突いて布団から飛び出す。俺とゴン爺を押しつけて部屋を吹き抜ける風の如くである。呆然と少女が出て行ったドアの方を見ながらあっけにと取られていると、外からは「ぎゃー、牛が！馬がー！」、などと悲鳴の様な叫びが聞こえてくる。がつくり肩を起こしていると、お前が捕まえて来い、といわんばかりの視線がコネットと足元のゴン爺から俺の体を突き刺してくる。

少女が落ち着いたのは、それから三〇分ほど経った後であった。

6 (後書き)

ご意見・ご感想お待ちしておりますー♪

7 (前書き)

新キャラです。

迷子の迷子の女の子。

アリーシア・克蘭ニエス：一七歳 迷子になった女の子

気分的に落ち着いてきた私は、一階のリビングを見渡す。中央に設置されているテーブルはかなり大きく、あとで聞いた話では経営する農場と牧場の従業員が食事をしたりできる食堂も兼ねているらしい。

そのテーブル真ん中当たりで、村中を錯乱していた私を捕まえにきた男に小柄な一つ目の生き物、そして顔は限りなく人間に近いが鼻や口、ヒゲなどがありどう見ても猫の女性。ダークブラウンの髪の毛の頭部から三角の耳が二つ、時に片方の耳だけがぴくぴく動いたりしている。村の中には人間のように生活している牛や馬等の姿もみことから、猫はそれに比べたら最初のように騒ぐほど驚きはしない。

「私の名前は、アリーシア・クランニエス。歳は一七です」

少しだけ緊張で声が上がってしまったが、気にせず一礼する。他にも何か言った方がいいのかと思案していると、隣に座った男が口を開いた。

「俺はイズル。近くの町で相談所の職員をしている」

「相談所？」

ここが私の住んでいた世界ではなく、異界と呼ばれる場所だという事はこのイズルという男に肩に担ぎ上げられて、この家まで運んでくる時に聞かされていた。胡散臭い、なんて思ったけど私のいた世界には居ない生き物がいるから、案外すんなり受け止められた。

城の教育係に聞かされていた異界とは、魔王という存在が支配す

るもつとドロドロとした雰囲気の世界だと思っていたが、そんなことはなく私の世界となんら変わりがない。むしろいろんな生き物達が共存しているこの村は、私の知っている世界に比べ清らかささえ感じる。

それに驚く事はまだあったが、一番はヒトという考え方。いろんな生物がいるけれど一括りでヒトと呼んでいるのは凄く不思議に思う。

「ああ、相談所って言うのはこちら辺の土地に新しく来た人に、その土地にあるルールを教えたりまたは今回の君の様な迷子を保護したりしている所さ」

「城下町の警護兵とかの詰め所みたいなもの？」

「ああ、そんな感じだ」

イズルはこくりと頷くと、私の目の前にすわる女性の方へ手を開ける。

「こちらは、コル村で農場と牧場を経営している猫人のコネットさん」

「あ、この度はご迷惑を」

先程の事を思い返しながらコネットに向けて頭を下げる。知らなかったとは言え、化け物呼ばわりされたら私だつたら起こってしまう。その事をイズルに背中越しに聞かされたときには、さあーっと血の気が引いた程だ。

その私の考えを見越しているのか、コネットは笑顔を浮かべる。

「私はコネット。さっきのは気にしてないから安心してね」

私に笑顔を向けたコネットに申し訳なく思い、視線をコネットの

顔から少し下に下げる。お茶の入ったカップに添えられている手が目に入った。人間のように指は5本あるが、手の甲側には毛が生えており縞模様になっている。

「もし知っているヒトに化け物呼ばわりされたら、昔の傭兵時代の装備を引っ張り出して撲殺の刑に処するけど」

今何か恐ろしい事が耳に入ったような気がするが、あえて気のせいという事にしよう。

「アリーシアちゃんみたいに、この世界に初めて来たヒトなら仕方ないよ」

気を使ってくれているのか、柔らかい笑みを浮かべながらコネットはお茶を啜る。それにつられて差し出されたお茶を口にする。

「わしはゴンじゃ。もう年寄りだから皆からはゴン爺と呼ばれておるよ」

口元のひげをもさもさ動かすその姿は、最初こそ驚いたが慣れて来ると愛くるしさが浮かんでくる。

このままほんわかしそうな気持ちが生まれてきていたが、それをぐつと押さえ先程のコネットの言葉に質問を投げ返す。

「コネットさんは、どうして私がこの世界に初めて来たと？」

「あつはつは、そりゃわかるわよ。だってこの世界には、あんなふうに騒ぐヒトなんて居ないんだから」

コネットの答えを聞いて、それはそうだ、と心の中で頷いてしまった。

話を聞くと過去にも、同じような人が沢山いるらしい。元の世界へ帰った人もいれば、この異界で暮らしている人もいるらしい。このコル村発の馬車の運転手は、私と同じ世界の人なのだと隣に座っているイヅルが教えてくれた。機会があつたらぜひとも話を聞いてみたい、そんな事を考える余裕すら徐々に自分の中に生まれつつあった。

こんななのどかなのは祖母の家に居た時以来だと、今は居ない祖母の顔を浮かべつつチラリとイヅルの方に視線を向ける。この顔にはどこか見覚えがあり、なんとなく懐かしささえ感じる。しかしその考えを、脳内で必死に頭を振り乱しかき消した。そんなはずはない、この世界のヒトに知り合いがいるわけでもない。本来の世界では誰彼と知り合える程自由な身分ではない。

ここにいる三人には自分について詳しく話すべきか迷ったが、隣にいる男——イヅルは相談所という所で働いているという事もあり、本来であれば見ず知らずの者に自分の事を明かすのは好ましくない。しかしここは異界という事もあり、そんな事は今は意味をなさないと考え談笑から一転し意を決する。

「私……実は——」

初対面の相手ではあるので、言葉を選び慎重に自分の事を紐解いて行く。

7（後書き）

しばらく戦闘シーンなんてないんだからね！！

漫画と違って視覚表現がないから、小説は本当難しいですね。

表現を文章に書き表せる技術と、知識が欲しいこのごろです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5473q/>

異界の相談所～ハローワーカー～

2011年10月6日17時11分発行